

「エルサレム入城」

(マルコ11:1~11)

挽地茂男

2018.8.19 日本基督教団千歳丘教会

※マルコの本文は最終頁にあります

世界には有名な凱旋門がいくつかございますが、おそらく凱旋門と言えば、パリの凱旋門を思い出されるのではないのでしょうか。この凱旋門（エトワール凱旋門）は、1805年のアウステルリッツの戦いに勝利した記念に1806年、ナポレオン・ボナパルトの命によって建設が始まり、1836年に完成します。ナポレオンは凱旋門が完成する前に既に死去しており、彼がこの門をくぐったのは



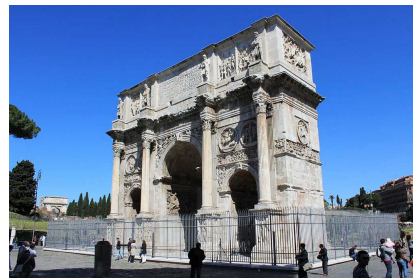
パリの凱旋門

1840年に死去したセントヘレナ島からパリに改葬された時〔お墓を移したと

き〕でした。古代ローマの凱旋門を手本にして造られた代表的な凱旋門の一つです。

他方ローマの凱旋門（コンスタンティヌスの凱旋門）は、ローマ帝国皇帝コンスタンティヌスが「ミルウィウス橋の戦い」でマク

センティウスの軍団を撃破した、312年の勝利（戦勝）を記念して造られました。1960年のローマ・オリンピックでは、マラソン競技の優勝者エチオピアのアベ・ビキラが〔裸足で



ローマの凱旋門

42.195キロを走り抜いて〕この凱旋門にゴールしました。そのほか凱旋門はパリやローマだけではなくヨーロッパには多く残っていますが、それらはみな数々の戦いの勝利（と一方で敗北）を歴史に刻んでいるのです。先のパリの凱旋門は1940年6月14日、ナチス・ドイツ軍がフランスを侵略し、パリに占領をはたしますと、ナチス・ドイツ軍が凱旋パレードを行う背景になります。その写真が残っています。

戦争を離れたところでは、オリンピックが終わりますと、最近では日本でも、銀座の大通りをオリンピック選手たちが凱旋パレードをしたり、プロ野球の優勝チームが優勝パレードをしたり、お相撲の横綱だって優勝パレードをしたりします。あのトランプ新アメリ

カ大統領も就任のパレードを致しました。凱旋パレード、凱旋入城というのは、凱旋してきた人々の勝利を、その強さと成功と支配力と権力を誇示し、古代世界では特に、軍事的な勝利を公に知らせめ、勝利者の勝利や征服を知らせめすことによって、人民の従順を暗黙の内に要求するものでありました。

今日、主イエス・キリストは、エルサレムに凱旋してきます。今日の聖書箇所は、その主イエスの凱旋入城（パレード）を描いているのです。

主イエスが凱旋入城、というと、少し違和感を感じておられるかも知れませんが。イエス様は戦争なんかと関係ない方だし…。しかしこの場面が「凱旋入城」の場面であることを理解しておくことは大切



です。「そんな風には見えないけど」とおっしゃるかも知れません。そんな風に見えないからこそ大切なのです。十字架で主イエスが死んで救いが完

成した。「そんな風には見えないけど。」そんな風に見えないからこそ大切なのです。9節後半から10節にかけて見てみましょう。

9b「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。
11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。」

ダビデの国が今や実現したと言うのです。この「我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように」（Εὐλογημένη ἡ ἐρχομένη βασιλεία τοῦ πατρὸς ἡμῶν Δαβὶδ・）

の部分の「来るべき」は訳としてはまずいのです。「来るべき」は未来的なニュアンスが強すぎます。ここは現在分詞（進行形）で書かれていて「今来つつある」「いま目の前に来ているところの」という意味で書かれています。単純に直訳すれば、「祝福あれ。」「祝福あれ、今来たりつつある我らの父ダビデの（王）国に」となります。「父ダビデ」とは「祖先／父祖のダビデ」という意味です。救い主はこの名君ダビデの子孫としてやって来るといっているので〈ダビデの子〉と呼ばれるのです。今やダビデの子イエスが、ダビデの（王）

国の(首)都に入城して来たのです。そしてこの王国が、今〈ダビデの子〉によって確立されようとしているのです。彼(主イエス)こそがユダヤ人の王なのです。

このような凱旋入城には、特に古代ギリシア・ローマの凱旋入城には入城行進に一定のパターンがあります。普通四つの要素を含みます〔すべての要素が全部そろっている場合もそろっていない場合もありますが〕。まず第一に(1)先導役がいます。征服者／勝利者は、一般市民または勝利者自身の軍隊に先導されて町の中に入っていきます。そして第二に(2)人々の喝采が勝利者を迎えます。そして凱旋行進には、讃美や歓呼の音が響きます。そして第三に勝利者の(3)権威と力が誇示されます(権威の誇示)。勝利した支配者・勝利者の権威を示す様々な象徴的要素が行進にちりばめられます。例えば、勝利者が神の名前で呼ばれたり、勝利によってもたらされた戦利品や捕虜、あるいは自軍の勇猛な軍隊や兵器が行進に加わります。そして最後第四に勝利者は、(4)神殿に赴き、献げ物を致します(神殿での儀式)。入城後、神殿で執

り行われる犠牲奉献のような占有の儀式が、征服者が軍事的にも精神的にも町と人民を占領(占有／支配)するに至った(玉を取った)ことを、あるいは勝利が神の御旨と加護を証しするものだということ象徴的に表すのです。

アレクサンドロス(アレキサンダー大王)がエルサレム入城を果たし(紀元前4c)記録が、ヨセフスという人の書いた『ユダヤ古代誌』(11, 332-36)という紀元1世紀の本に出てきます。こう記されています。



すると、すべてのユダヤ人が声を合わせてアレキサンダーに挨拶し、彼を囲んだ…〔そして〕彼は大祭司に手を差し出し、ユダヤ人が小走りに彼についてくる中を、都に入った。それから彼は神殿に上り、大祭司の指示に従って神に犠牲を捧げた。

先導役と人々の喝采と神殿での儀礼が記されています。

ローマの三頭政治〔アントニウス、オクタウィアヌス、レピドゥス〕の時代(紀元前40年頃)に行われた、アントニウス〔ローマ

の将軍、クレオパトラの恋人、共同統治者〔14年間〕のエペソ入城の記録が、プルタルコス『英雄伝』（「アントニウス」24,3-4）という本に残されています。

アントニウスがエペソにはいると、女たちはバッカス〔酒の神〕の祭女に、男と少年たちはサテュロス〔神〕とパーン〔神〕に扮装して彼の行列を先導し、町は蔦の葉、祭の杖、手琴（てきん）、笙〔楽器〕、笛に満たされた。人々は彼を、歓喜と恩恵の贈与者ディオ



オニュソスだと歓呼して迎えた。なるほど、彼は確かにある人々にはそのような存在であった。

先導役と人々の喝采とアントニウスを神の名前で呼ぶ、彼の権威の誇示がはっきりと出てきます。(1)先導役と、(2)人々の喝采と、(3)権威の誇示と、(4)神殿での儀式が古代の凱旋入城を構成する基本的な要素なのです。主イエスの凱旋入城をこの要素に照らして見てみましょう。7節から先ほどの節も含めてみてみましょう。7節。

11:7 二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。11:8 多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。11:9 そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」11:11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回ったまず(1)先導役です。主イエスは自分の服を道に敷く人々や葉の付いた枝を道に敷く人々（v. 8）に先導されてエルサレムに入城してきます。そして(2)人々の喝采です。凱進行進を歓迎する人々は「前を行く者も後に従う者も」歓呼の詩編〔詩118:26＝ハレル詩編／詩118:26 祝福あれ、主の御名によって来る人に。〕を叫んでいます。「11:9 ……「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福

があるように。いと高きところにホサナ。」そして三つ目に(3) **権威の誇示**ですが、この部分は非常に抑制された形で、行進の様々な部分に現れています。主イエスは、自分の乗る子ろばの調達について予言を与え、調達する者たちに人が何か言ったら「主がご入り用なのです」と答えるように教えて、自分が主として（神として）子ろばを徴用されることを明らかにします。そして人々が道に服を敷く行為も、人々の讃美の声も主イエスの神的な権威を支持します。そして四つ目に(4) **神殿での儀式**ですが、聖書はこう記しています。11節。「11:11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、」神殿には入ったのですが、その後です。「もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた」と書かれています。神殿を訪問し、境内の様子を見て回り、もう遅いので、神殿を後にしてベタニアへ出て行ったのです。ただ訪問を目的にやってきた観光客のようです。神殿で儀式を行うそぶりも見せずに去って行かれました。

しかし「**辺りの様子を見て回った後**」(περιβλεψάμενος πάντα) という表現には注意が必要です。「見て回る」と訳されている動詞は、新約聖書に7回出てくるうち6回がマルコによる福音書に出てきます。〔あと1回はルカにでてきますが、マルコの並行記事です。〕この単語はマルコに特徴的な単語なのです。そしてマルコがこの動詞を、主イエスを主語にして使うときは、主イエスは「信仰の有無を確かめる」ために「見回す」という文脈になります。そして新共同訳は「**辺りの様子**を」と訳していますが、「すべてのものを」(πάντα) というのが正しい訳です。ですからこの部分の意味は「すべてのものを信仰的な視点から見定めた後」という意味なのです。主イエスが見定めた結果、エルサレム神殿、そこは本来あるべき礼拝を献げることのできる所ではなかったのです。祈りの家ではなかったのです(11:17, 「強盗の巣」)。神の子を受け入れるところではなかったのです。



この理解を背景にして、神殿境内において、神殿に献げ物の動物を売る商人や両替商を追い出す暴力的（暴挙）とも思える主イエスの「宮清め」、実のなっていないイチジクの木への呪い、そして枯れたイチジクの木から説き起こされる本来の信仰の生きた姿、生きた信仰とは対照的な数々の論争、むしろ論争という名を借りた不信仰、真摯な議論という形の信仰的（靈的）腐敗、そして12章の最後に、神殿境内の論争物語の最後に添えられた「小さな献身の物語」寡婦の献金の物語が理解されてくるのです。

主イエスの凱旋入城が「凱旋入城」に見えない理由のもう一つは口バの存在です。普通は軍馬に乗ります。ソロモン王の軍事力を表現するときも、戦車用の馬のための厩舎40,000、戦車1,400台、騎馬兵12,000人、と表現します。彼はさらに戦車隊の町、騎兵隊の町を設けていたのです（列上5:6, 10:26, 代下1:14, 9:25）。今ならトマホーク何基、原子力空母何隻のような言い方になるのでしょうか。ナポレオンも、先代の北朝鮮の指導者も、暴れん坊将軍〔例が古い

のでご寛恕を〕も馬に乗って颯爽と登場します。しかも白馬で。主イエスの凱旋入城は、どう見ても勇壮な軍事的入城には見えないのです。口バに乗っているのですから。しかし口バに乗ってこられるのは、この場面の背景に、一つの旧約預言があるからです。マルコはそれを明示していません。しかしこの場面はその旧約聖書の預言なしでは理解できません。マタイとヨハネはその預言を明らかにしています。マタイを読んでおきましょう。マタイの21章4－5節です。

マタイ21:4 それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

21:5 「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、／柔和な方で、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」



そしてこのこの預言を語ったのはザカリヤという預言者です。その旧約の預言そのものを見ると、もっと意味が鮮明になってきます。

ゼカリヤ9章9－10節です。

ゼカリヤ9:9 娘シオン〔シオンはエルサレムのこと〕よ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。9:10 わたしはエフライム〔預言者ではイスラエル王国と同義〕から戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。

「軍馬を絶つ」「戦車を絶つ」平和の宣言なのです。口バに乗ってやって来る王は、軍事的な平和を実現する王ではないのです。「高ぶることなく、子口バに乗って来る」王なのです。征服ではなく平和の実現者として入城されるのです。軍馬ではなく口バに乗って来られる様が、**征服のために来たのではない**ことの象徴です。

エルサレムという名前は〔諸説ありますが〕、もともと「平安/平



和の町」という意味をもっています。この町は真の神を認めることを平和の礎にした町なのです。ルカによる福音書は、エルサレム入城にあたって、主イエスがエルサレムを遠くに見ながら「泣いた」と伝えています。ルカによる福音書19章41－44節

ルカ19:41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、19:42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。19:43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、19:44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

神の平和を実現すべき町でありながら、平和への道を知らないこの町に、破壊の預言が語られます。現代の世界はどうなのでしょう。我が国はどうなのでしょう。口バに乗る勇気のある国や、指導者はいるのでしょうか。できるだけ威力のある、大きな武器を誰もが振

り回そう
としてい
るのでは
ないでし
ょうか。



この神の平和が支配すべき町エルサレムが、真の平和に満たされる時は、主を認めるまで実現しないと、主イエスは言われます。ルカ 13 章 34 - 35 節。

ルカ 13:34 エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。13:35 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

真の王はふつうの王の姿をしていないのです。軍事力と経済力を誇る王しか求めない者に、真の王は理解できないのです。真の王は征服（支配）ではなく平和をもたらすのです。真の平和は真の王によってもたらされるのです。聖書

は、真の王はふつうの王の姿をしていない、と教えます。マタイによる福音書 25 章 37 - 40 節
25:37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。 25:38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。』

25:39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』 マタ 25:40 そこで、王は答える。『はっきりに言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

真の王は（救い主は）、小さな者の姿を取ってやって来るのです。
真の王は（救い主は）、仕える者の姿を取ってやって来るのです。
真の王は（救い主は）、飢えた者の姿を取ってやって来るのです。
真の王は（救い主は）、渴いた者の姿を取ってやって来るのです。
真の王は（救い主は）、涙する者の姿を取ってやって来るのです。

真の王は（救い主は）、ロバに乗ってやって来るのです。本当の王は王の姿でやってはきません。水戸黄門は越後の縮緬問屋〔これまた古いテレビドラマ。ご寛恕を〕に身をやつしてやって来るのです。エリザベス女王が鳴り物入りでやってくればわたしたちは簡単に頭を下げる事ができるでしょう。暴れん坊將軍も白馬に乗って、あるいは奴さんに先導される長い行列でやってくれば「はははーっ」と頭を下げる事ができるでしょう。粋な侍の「しんさん」〔ご存知ですか〕ではわからないのです。神の子も神の子の姿でやってこないのです。貧しい大工の子としてやって来るのです。神の子は**十字架で苦しむ者の姿**を取ってやって来るのです。



主イエスは、エルサレムに入城されました。神殿は神のいます場所、神の平和を享受する場所では、すでにありませんでした。では、

わたしたちは主の凱旋をお迎えしているのでしょうか。パウロはわたしたちが神の神殿であると教えます。コリントの信徒への手紙一 3章 16－17節

¹⁶あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。¹⁷神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。

同じく第一コリント書 6章 19節 6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

神の神殿であるわたしたちは、「**主の名によって来られる方に、祝福があるように**」と賛美し、エルサレムに入城した主が、最後においでになり、神に感謝をささげる場所となっているのでしょうか。神殿とは、平和と祈りと喜びと讃



美の満ちている所です。「11:9…ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

ルカ福音書ではこの賛美自体に、平和の要素が加わります。19章38節。19:38 「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」

まるで「イエス・キリストの誕生」の際の天使と天の大軍の賛美です（ルカ2:13f, 20）。

ルカ2:14 「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

主イエスのエルサレム入城では、「地には平和」ではなく「天には平和」と語られます。なぜでしょうか。それは御心が天になるように、地上には成っていないからです。人々が王としてイエス・キリストを迎えたときに、平和の王がもたらす「天の平和」が、「地の平和」となるのです。

「平和への道」とは主イエス・キリストを心の王として迎えることによって始まり、主イエス・キ

リストがわたしたちの心の王座を占めることによって回復し、大きく他の人々を包んでいくのです。キリストは平和の福音を告げ知らせるためにこの世界にこられました。エフェソ書2章17節。

2:17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。平和の主と共に、新しい1週間を歩んで参りましょう。



11:1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、

11:2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。

11:3 もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」

11:4 二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。

11:5 すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。

11:6 二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。

11:7 二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。

11:8 多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原か

ら葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。

11:9 そして、前に行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。

11:10 我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

11:11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

11·1 Καὶ ὅτε ἐγγίζουσιν εἰς Ἱεροσόλυμα εἰς Βηθφαγὴ καὶ Βηθανίαν πρὸς τὸ Ὄρος τῶν Ἐλαιῶν,

ἀποστέλλει δύο τῶν μαθητῶν αὐτοῦ
11·2 καὶ λέγει αὐτοῖς, Ὑπάγετε εἰς τὴν κώμην τὴν κατέναντι ὑμῶν, καὶ εὐθὺς εἰσπορευόμενοι εἰς αὐτὴν εὐρήσετε πῶλον δεδεμένον ἐφ' ὃν οὐδεὶς οὕπω ἀνθρώπων ἐκάθισεν· λύσατε αὐτὸν καὶ φέρετε.

11·3 καὶ ἐάν τις ὑμῖν εἴπῃ, Τί ποιεῖτε τοῦτο; εἴπατε, Ὁ κύριος αὐτοῦ χρεῖαν ἔχει, καὶ εὐθὺς αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν ὧδε.

11·4 καὶ ἀπῆλθον καὶ εὗρον πῶλον δεδεμένον πρὸς θύραν ἔξω ἐπὶ τοῦ ἀμφοδίου καὶ λύουσιν αὐτόν.

11·5 καὶ τινες τῶν ἐκεῖ ἐστηκότων ἔλεγον αὐτοῖς, Τί ποιεῖτε λύοντες τὸν πῶλον;

11·6 οἱ δὲ εἰς αὐτοῖς καθὼς εἶό Ἰησοῦς, καὶ ἀφῆκαν αὐτούς.

11·7 καὶ φέρουσιν τὸν πῶλον πρὸς τὸν Ἰησοῦν καὶ ἐπιβάλλουσιν αὐτῷ τὰ ἱμάτια αὐτῶν, καὶ ἐκάθισεν ἐπ' αὐτόν.

11·8 καὶ πολλοὶ τὰ ἱμάτια αὐτῶν ἔστρωσαν εἰς τὴν ὁδόν, ἄλλοι δὲ στιβάδας κόψαντες ἐκ τῶν ἀγρῶν.

11·9 καὶ οἱ προάγοντες καὶ οἱ

ἀκολουθοῦντες ἔκραζον, Ὡσαννά· Εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος ἐν ὀνόματι κυρίου·

11·10 Εὐλογημένη ἡ ἐρχομένη βασιλεία τοῦ πατρὸς ἡμῶν Δαβὶδ· Ὡσαννά ἐν τοῖς ὑψίστοις.

11·11 Καὶ εἰσῆλθεν εἰς Ἱεροσόλυμα εἰς τὸ ἱερόν καὶ περιβλεψάμενος πάντα, ὅψίας ἤδη οὔσης τῆς ὥρας, ἐξῆλθεν εἰς Βηθανίαν μετὰ τῶν δώδεκα.